

うことが言える。先行研究においては、条件節をいくつかのタイプに分類することにより (3) のような事象を説明しようとする分析が多く見られる。次章では、先行研究として条件節を統語的、意味的特徴により分類し、それぞれの持つ統語構造あるいはLF表示が異なることにより will の生起可能性に違いが生じるとする分析をいくつか挙げ概観していく。

3. Haegeman and Wekker (1984) による条件節の分類と統語構造の提示

Haegeman and Wekker (1984) は、条件節を統語的に 2 つのタイプに分類している。

- (4) a. If it rains tomorrow the match will be cancelled.
 b. If it will rain tomorrow, we might as well cancel the match now.
 (Haegeman and Wekker (1984))

(4a) の if 節を主節で言及された出来事 (event) が生じる条件を明らかにする中心的 (central) 条件節、(4b) の if 節を発話行為において話者のコメントを構成する周辺の (peripheral) 条件節と呼び、両者が異なる統語的特徴を表すとしている。例えば、中心的条件節は分裂文を作ることはできるが、周辺の条件節では非文法的と判断される。

- (5) a. It is if it rains tomorrow that the match will be cancelled.
 b. *It is if it will rain tomorrow that we might as well cancel the match now.
 (Haegeman and Wekker (1984))

両者の示すこのような統語的特徴の違いは統語的位置の違いに起因するものとされ、中心的条件節を主節の修飾要素として、周辺の条件節を主節から独立した部分の修飾要素として構造を仮定している。そのような構造を持つことにより、中心的条件節は主節動詞の時制やモダリティの作用域内に入り、意味解釈のレベルにおいて上位節にある助動詞に基づいて条件節の現在時制に未来解釈が付与される。一方で周辺の条件節は主節の作用域の外にあり、条件節の時制やモダリティは独立して機能する。そのため、(4b) のような周辺の条件節では未来を表すために will が生起すると説明されている。

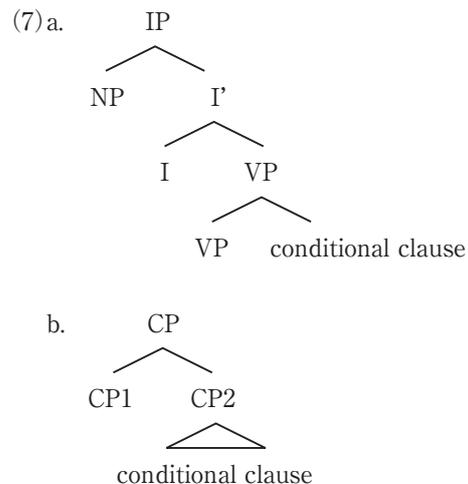
4. Haegeman (2003) における分析

4.1 条件節のタイプと外部構造の違い

Haegeman and Wekker (1984) で中心的条件節と周辺の条件節に分類された 2 つのタイプの条件節は、Haegeman (2003) において次のように区別されている。

- (6) a. If it rains we will all get terribly wet and miserable.
 b. If [as you say] it is going to rain this afternoon, why don't we just stay at home and watch a video?
 (Haegeman (2003))

(6a) は、条件節が主節の事象 (event) を修飾しており、主節で示された結果につながる原因を表す役割を果たしており、一方で (6b) の条件節は談話 (discourse) を構築しており、主節の前提となる文脈 (context) を明示するものである。Haegeman (2003) は前者を事象条件節 (event conditionals) とし、後者を前提条件節 (premise conditionals) として区別した。事象条件節は Haegeman and Wekker (1984) における中心的条件節に、前提条件節は周辺の条件節に相当する。Haegeman (2003) は、Haegeman and Wekker (1984) と同じく、両者の示す統語上あるいは解釈上の違いは、それぞれの統語構造に反映されているとしている。事象条件節は (7a) に示す通り、VP に付加される形で主節の領域内に構造的に統合されており派生の早い段階で主節と併合されるが、前提条件節は (7b) のように独立して周辺の位置にあり主節が派生された後に併合され、CP に付加される。



事象条件節は前提条件節よりも深く埋め込まれており主節の作用域内にあるが、前提条件節は主節の作用域外にあるという点では、Haegeman and Wekker (1984) と

同じように捉えられている。

4.2 それぞれのCP内部構造

(7) は両者の外部構造の違いを示したものであるが、Heageman (2003) は、さらにこれらの条件節はそれぞれ異なる内部構造を持つと提案している。事象条件節を含む中心的副詞節は、主節と発話の力 (illocutionary force) を共有しているのに対し、前提条件節を含む周辺の副詞節は主節から独立した形で発話の力を持つ。その証拠として、中心的副詞節には認識様態を表す法要素やprobablyなどの発話行為に関わる副詞が生起できないことを挙げている。Haegeman (2003) では、Rizzi (1997) に基づきCPには階層構造があるとし、中心的副詞節と周辺の副詞節ではCP内の要素が異なると提案している。

- (8) a. Central adverbial: Sub>Fin
 b. Peripheral adverbial: Sub>Force>Top*>Focus>Top*>Fin
 c. Root clause: Force>Top*>Focus>Top*>Fin

Heageman (2003) は、発話の力をエンコードする主要部と、単に節を従属する働きを持つ主要部を切り離して考えるべきであるとし、ifなどに導かれる節の主要部としてSubを仮定している。周辺の副詞節は主節から独立した発話の力をもつためSubがForce以下の全ての要素を満たした形のCP階層を持ち、一方で中心的副詞節はCP階層にForceを持たず、それに伴いTopおよびFocusも欠落した形をとっている。さらに、Heageman (2006) においてこの内部構造についてさらに修正が加えられ、Forceを話し手の直示 (Speaker deixis) であるSDという概念に置き換えた次のような構造が提案されている。

- (9) a. Central adverbial: Sub Fin
 b. Peripheral adverbial: Sub Top Focus SD Fin
 c. Root clause: Top Focus SD Fin

この構造の下では、左方周辺部 (left periphery) は話し手に関連する要素を含んでおり、SDが投射されている場合には話題化、認識様態のモダリティー、話し手に関わる副詞などが認可される。一方、SDが投射されない場合にはTopやFocusも投射されないCP構造となり、認識様態のモダリティー等を認可する要素が存在しないとされる。

Haegeman (2003, 2006) の考えに照らし合わせると、事象条件節は主節の作用域内にあり、主節から未来解釈を得ることができるため条件節内にwillを生起させる必要がなく、さらにCP内部構造にSDが存在せず認識的

法のwillは認可されないため、条件節内にはwillが生起できないという説明が可能となる。これに対し前提条件節は主節の作用域から独立しており、未来性を表すためにwillが生起可能となると言え、かつ周辺の副詞節に含まれる前提条件節のCP構造は要素がSDを含む完全な形で存在しており、認識的用法のwillを認可できる。この分析は、条件節内に根源的用法のwillだけでなく、認識的用法のwillが生起可能となるような例に説明を与えることができると言える。

5. 金子 (2009) での分析

5.1 条件節の分類とそれぞれのLF表示

金子 (2009) は、(10a) のような条件節を様態認識のif節 (epistemic *if*-clause) に、(10b) のような条件節を因果関係のif節 (causal *if*-clause) に分類し、それぞれの条件節の分布について、(10c) に示すように、認識様態のif節はTPの外に、因果関係のif節はTP内に生起している。

- (10) a. Chris must be home if his light is on.
 b. John will be happy if pictures of himself are on sale.
 c. [_{CP}... Epistemic *if*-clause... [_{TP}...Causal *if*-clause...]]

認識様態の条件節は遂行節 (Performative clause) に属し、このような発話行為の修飾要素はTPの外側の機能範疇である遂行節 (Performative Phrase = PfmP) 内の要素とみなされる。さらにLFで、PfmPの主要部Pfmに随意的に含まれる抽象的な法演算子 (Mod) の制限要素となる。(10a) は (11) のようなLF表示を持つとされる。

- (11) [_{PfmP}{ if his light is on } [_{Pfm}Mod] [_{TP}Chris must be home]]

一方、因果関係のif節は主節の法助動詞を制限する働きを持つ。(10b) のLF表示は (12) のようになる。

- (12) [_{TP}John_i [_{ModP} { if pictures of himself_i are on sale } will] [be [_{t_i} happy]]]

また、因果関係のif節に顕在的な法助動詞が存在しない場合の分析については、(13) のように非顕在的な総称法演算子 (Mod_{GEN}) を仮定することで説明されている。

- (13) a. Every mother_i is upset if her_i child is late from school.

- b. [_{TP} every mother_i [_{ModP} if her_i child is late from school } Mod_{GEN}] [is upset]]]

5.2 条件節内の未来解釈の認可

金子(2009)は、認識様態のif節と因果関係のif節が示す条件節内の代名詞束縛に関する文法性の違いに対し、それぞれの条件節のLFにおける統語的位置の違いにより説明を与えている。さらに、このように条件節を捉えることにより条件節内に生起するwillについても説明可能であることも示している。(14a)のような条件のif節は、現在時制形で未来の出来事や状態に言及することができる。

- (14) a. If the boat sinks, we will get drowned.
 b. [_{TP} we_i [_{ModP} if the boat [+Pres] sinks } will [_{t_i} get drowned]]]

(14a)は因果関係のif節であるため、そのLF表示は(14b)のようになる。この場合、主節が未来時に言及する法助動詞willを含んでおり、この主節のwillに依存する形で条件節の現在時制が未来解釈を持つことができるとし、金子(2009)は、条件節を含む付加詞節の未来解釈認可について次のように一般化している。

- (15) 付加詞節現在時制の未来解釈の認可
 条件のif節と時を表す付加詞節の現在時制は、主節の未来形をもつ助動詞の時の解釈に関与する場合、未来の出来事・事態を指すことができる。

この一般化に従えば、主節のwillが条件節の現在時制に未来解釈を認可することになり、(14)のような例の文法性を正しく捉えることが可能となる。また、認識様態の条件節については、次のような説明が与えられている。

- (16) a. If Tom wins the race tomorrow, we have not labored in vain.
 (Tedeschi (1976))
 b. [_{Pfmp} {If Tom [+Pres] wins the race tomorrow } Mod [_{TP} we have not labored on vain]]
 (金子 (2009))

(16a)は条件節の内容が主節の出来事の生起条件となっていないため、認識様態の条件節であると言える。そのため、(16a)は(16b)のようなLF表示を持つと考えられる。金子(2009)は、認識様態の条件節が制限する演算子Modは語用論的にwillと同等の法性を表し、このModが条件節内の現在時制に未来解釈を認可するとしている。このように、条件節内の現在時制が未来解釈を持つ現象は、(15)で示す一般化によって説明可能となる。

5.2 Haegeman and Wekker (1984) の分析への帰結

金子(2009)は、(15)の一般化がHaegeman and Wekker (1984)で示された分析に一定の帰結をもたらすとしている。まず、金子(2009)はHaegeman and Wekker (1984)の分析では、先述の(16)のような例について不備が生じる可能性を指摘している。(16)は認識様態の条件節であり、Haegeman and Wekker (1984)での周辺の条件節にあたる。(16)の条件節は主節の作用域の外にあり、条件節の時制やモダリティは独立して機能する。そのため、Haegeman and Wekker (1984)の分析に従うならば、条件節内に未来解釈を表すためのwillが生起するはずであるが、(16)の条件節にはwillが生起しておらず、この例の文法性を正しく捉えることができない。この点について金子(2009)は、Pfmが随意的に法演算子を含むことができると仮定した上で(15)の一般化を採用することにより説明可能であるとする。

- (17) a. [_{Pfmp} {If ... [_T +Pres] ... } [_{Pfm} Mod] [_{TP} ...]]
 b. [_{Pfmp} {If ... will ... } Pfm [_{TP} ...]]

条件節が未来解釈を得るためには、その条件節が制限要素となる法助動詞がもつ未来性に依存することになる。認識様態の条件節は、主節の外側にあるPfm領域に属する要素であるため主節内のwillの持つ未来解釈に依存することはできない。しかし、PfmPの主要部が抽象的な法演算子としてModを含むとするならば、(17a)に示されるようにこのModから未来解釈を得ることができると考えられる。一方、PfmPにModが含まれない場合は条件節が未来解釈を得るために依存する要素がない。そのため(17b)に示されるように、条件節内にwillの生起が必要となる。このように分析することにより、Haegeman and Wekker (1984)の分析では正しく捉えられなかった現象について説明可能であることを示した。

6. 先行研究における課題と今後の展望

ここまで、条件節の未来解釈について先行研究を概観してきた。本章ではまず、それぞれの分析に残された課題について整理していきたい。

Haegeman and Wekker (1984)については、前章でも言及したとおり、(16)の例にあるようにwillが生起していないにも関わらず条件節が未来解釈をもつような現象に対して、条件節がどのように未来解釈を得るかについて説明に不備が残ることが金子(2009)によって指摘されている。

Haegeman (2003, 2006)の分析についても同様の問題が生じる。Haegeman (2006)で提案されたSDは、認識様態のモダリティを認可する役割を果たすことができるとされている。この分析下では、SDを含むCP階層を

もつ前提的条件節において、それを認可する要素が存在するにも関わらずwillが生起せず現在時制が未来解釈を得ているような例について、十分な説明を与えることができていない。金子 (2009) は、PfmPの主要部に随意的に抽象的な法演算子Modが含まれるとし、willが生起していない場合には条件節がこのModから未来解釈を受けると考えており、この点にうまく説明を与えている。

次に金子 (2009) について残された課題をいくつか見ていこう。まず金子自身が言及しているように、金子 (2009) では因果関係の条件節において現在時制が未来解釈を持つことができる理由については説明されているが、なぜこのタイプの条件節にwillが生起不可なのか明確にされていない。この点に関しては、Haegeman (2006) が、事象条件節 (金子 (2009) での因果関係の条件節にあたる) にSDが欠落したCP階層を仮定することによりうまく説明を与えていると言える。SDは認識様態のモダリティーの認可を担う要素であるが、このSDが欠落している構造においてはwillが認可されることがないため、このタイプの条件節にはwillが生起不可能であると説明できる。さらに、金子 (2009) で提示された (17) のようなLF表示構造において、演算子Modは随意的に含まれるとされているが、Modが含まれるかがどのようなプロセスで、あるいはどのような基準で決定されるかについて、より詳細な分析が必要であろう。

これらの点をふまえたうえで、今後どのような分析を行っていくべきかについて考察していく。

条件節が未来性を表すために現在時制を用いるのか、あるいはwillを生起させるのかに関しては、先行研究が示す通り条件節が主節の作用域に入るか否かによる説明、つまり、条件節の外部統語構造の違いによる説明が有効であると思われる。さらに今後は、条件節の内部構造を中心に、統語レベル以外の視点からもwill生起の可能性について分析をすすめたい。そこで、統語的視点にとどまらない観点からの先行研究について簡単に言及しておきたい。

例えば、吉良 (2005) は (18) において条件節内にwillが義務的に生起する理由について「時間の逆行回避」と述べている。

- (18) If it { will rain / *rains } tomorrow, we might as well cancel the match now.
(Haegeman and Wekker (1984))

通常、条件節を用いた表現では条件節で示された出来事が生じた結果が主節の内容につながるような解釈を持つ。しかし、(18) では条件節で示されている内容である「雨が降ること」が未来の出来事であり、それに基づいて主節の内容である「試合をキャンセルした方がいい」という意思決定が発話時に行われている。これを吉良

(2005) は「時間の逆行現象」とし、現実世界で物理的に起こりえないこの現象が生じてしまうことを回避するためにwillが義務的に生起する、と説明している。さらに吉良 (2005) は、条件節にある認識的法助動詞が客観的なモダリティーを表している場合に、willの生起が可能となるという条件を提示している。

- (19) a. If, as the weather forecast says, it *will rain* tomorrow, the game will be cancelled.
b. If, as he said, you *will be* hungry, there is a hamburger in the refrigerator.

(吉良 (2005))

(19) の例文は下線部が付加されることにより文法的となるが、吉良 (2005) によると下線部は第三者による査定であることを明示しており、この場合のwillは客観的モダリティーを表すものとなるため、(19) は文法的であると判断される。

また和田 (2011) は、定形節のタイプを発話態度領域に入るモダリティーを含むか否かによって分類し、それぞれのタイプの時制解釈メカニズムに注目し分析を行っている。和田 (2011) は、Haegema and Wekker (1984) における中心的条件節のように認識的法助動詞などの話者態度領域要素が現れないようなタイプは、主節の法助動詞の作用域が条件節にまで及ぶため「意味的に不完全な節」とし、一方で話者態度領域要素が生起可能なタイプは条件節内を独立した発話とみなすことができるため「意味的に自己完結した節」とし、これらを分類している。その上で、両者の時制決定基準時の違いにより、条件節内のwill生起に説明を与えている。

条件節の時制形式選択として、どちらのタイプであっても条件節に生じる定形動詞は発話時に話者の時制視点が置かれ、発話時から見た非過去 (現在、未来) に言及する場合は現在形が用いられる。しかし、この二つのタイプの条件節の言語的環境の違いが定形動詞の出来事時を測る基準の違いにつながる。

(20a) は、「意味的に不完全な節」であり、(20b) のようにとらえることができる。

- (20) a. If it rains tomorrow, the match will be cancelled.
b. ([_{SA1} will] ([_{P1} the match be cancelled] + [_{P2} it rains tomorrow]))

(和田 (2011))

ここでのSAは話者態度領域に入る要素を表し、Pは命題領域に入る要素を表す。和田 (2011) では (20a) は意味的に不完全な節であり、このような節は独立した発話を形成するために意味的に自己完結した節に寄生しなければ

ばならないと考えられる。さらにP1は意味的に自己完結した節の要素を、P2は意味的に不完全な節を表し、主節であるP1と条件節のP2は統合された命題としてSAの作用域内に入っていることが示されている。この場合、P2の定形動詞が表す出来事時を測る基準時はP1内の出来事時であるbeにおかれる。

一方、(21a)は「意味的に自己完結した節」であり、(21b)のようにとらえられる。

- (21) a. If it will rain tomorrow, we might as well cancel the match.
 b. ([_{SA2} will] ([_{P2} it rains tomorrow]))
 (和田 (2011))

(21b)では、条件節内の動詞はwillの補部に生じているので出来事時を測る基準点はwillの出来事時に置かれ、未来を表す副詞であるtomorrowの存在により未来時が選択される。和田(2011)は、自身の提案する時制理論に基づき、モダリティーの特性と時制解釈をうまく組み合わせることで条件節内に見られる時制現象を捉えようとしている。

吉良(2005)や和田(2011)が示すような視点から、willが表すモダリティーの性質や、時制決定のメカニズムなどの観点を含め分析をすすめることにより、統語的説明との整合性をより高めていき、これまでの金子(2009)やHaegeman(2006)などの分析と、どのように関連づけていくことができるかを中心に事象を捉え今後の研究へと繋げたい。

参考文献

- Bhatt, Rajesh and Roumyana Pancheva (2006) "Conditionals," *The Blackwell Companion to Syntax vol. 1*, ed. by Everaert, Martin and Henk van Riemsdijk, 638-687, Blackwell, Malden, MA.
- Dancygier, Barbara and Sweetser Eve (2005) *Mental Space in Grammar: Conditional Constructions*, University Press, Cambridge.
- 遠藤喜雄 (2009) 「話し手と聞き手のカートグラフィー」『言語研究』136, 93-119.
- von Fintel, Kai and Iatridou Sabine (2001) "On the Interactions of Modals, Quantifiers, and *If*-clauses," ms., MIT.
- Kaneko, Yoshiaki (2002) "Conditional *If*-clauses and the Covert Performative Modal in COMP," *Proceedings from Linguistics and Phonetics*, Charles University Press.
- 金子義明 (2009) 『英語助動詞システムの諸相—統語論・意味論インターフェイス研究』開拓社, 東京.
- 吉良文孝 (2005) 「主観的/客観的モダリティーと「否定」、「疑問化」、「条件化」」『英語青年』151.4, 234-237.
- Haegeman, Liliane and Herman Wekker (1984) "The Syntax and Interpretation of Futurate Conditionals in English," *Journal of Linguistics* 20, 45-55.
- Haegeman, Liliane (2003) "Conditional Clauses: External and Internal Syntax," *Mind and Language* 18, 317-339.
- Haegeman, Liliane (2006) "Conditionals, Factives and the Left Periphery," *Lingua* 116, 1651-1669.
- 中川右也 (2010) 「条件節内willの生起条件と概念化主体との関係について」『米子工業高等専門学校研究報告 (45)』
- Palmer, Frank Robert (1990) *Modality and the English Modals*, Longman, London.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvick (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar*, ed. by Haegeman, Liliane, 289-330, Kluwer, Dordrecht.
- Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.
- Sweetser, Eve (1996) "Mental Spaces and the Grammar of Conditional Constructions," *Spaces, worlds and grammar*, ed. by Fauconnier, Gilles and Eve Sweetser, 318-333, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Tedeschi, Philip (1976) *If: A Study of English Conditional Sentences*, Doctorial dissertation, University of Michigan.
- 和田尚明 (2011) 「日英時制現象の対象言語学的分析—条件節を事例研究として—」『文藝言語研究言語篇』60, 69-120.
- 山田彬亮 (2014) 「条件節の統語分析—日本語の事例に基づく欠落説と移動説の比較—」『言語情報科学』12, 37-53.